「日出ずる」
1936年イタリア・日本対抗陸上競技大会の様相
《教育と学習を区別し、伝統的な道徳を不変に生かし続け、その一方で学習を現代に必要な最新のものへと絶えず更新し続けている国は、私の知る限り全世界中でただ一つ、日本だけである。》（ピエール・ルコント・デュ・ヌイ著「心の未来」、1941年パリ、ガリマール出版）

日本では1867年に武家政権が終焉を迎え、政権は天皇に返上された（明治維新）。この政治体制の変化によって日本は封建制を脱し、現代化への道を歩み始めた。西洋の教師や商人達への扉が開かれ、若き先駆者達が海外へ留学したのであるが、それによって日本人は相撲や柔術、弓道のような伝統的なスポーツに加えて、西洋の娯楽も楽しみ始めた。一部にはあまり良い印象を持たれなかったものもあったが、陸上競技のように国民にすばらしい衝撃を与えたものもあり、数年後には学校や大学の授業の一部となった（トラック競技は公式には1886年の東京帝国大学運動会の創設とともに始まったとされるが、すでに帝国海軍兵学寮（1874年）や、札幌農学校（1878年）、さらには東京帝国大学で1883年に遊戯会が開催されていた）。1911年に大日本体育協会が誕生し、1912年にはオリンピックに初参加した。この新しい企てが成功したのは、神道と呼ばれる、仏教に対抗して国家機関の役割を果たすまでに上り詰めた古来の宗教によるところが大きい。《日本では国家的、帝国的な目標が神道信仰者の信条と完全に調和しており、さらに現代日本の業績や栄光、力といったものが、神道の持つ動機、熱意、刺激によって築き上げられた。その成功は、現在も続いている古来の宗教が復興したことの象徴のようにも見える。（ラッファエーレ・ペッタッツォーニ著「日本の宗教」20ページ、1929年ボローニャ、ザニケッリ出版）》

イタリアは1937年に日本という東洋の強大国と友好関係になったが、それは日本とドイツが1936年12月に合意に達していた日独防共協定を1937年に締結した後のことである（1936年10月にローマ･ベルリン枢軸が誕生し､1940年には日独伊三国同盟が成立した）。我が国では1937年に、中亜極東協会（ISMEO）が日本友好協会という文化的な団体の設立に賛同したが、これらの全てのことがらは1936年8月末にトリノで開かれたイタリア・日本対抗陸上競技大会よりも後のことである。この大会の開催は、ベルリン・オリンピックに出場した「日出ずる国」の選手団がヨーロッパに滞在していたから実現できたものである。ナショナリズムに基づいたファシズムによって禁じられていた《アメリカニズム》というイデオロギーに対抗して大きな成功を収めるこの東洋の国に、イタリアはこの時すでに魅力を感じていたのである。その証拠は、サンソーニ出版が1934年に創刊した「東洋読本」シリーズや、1936年にISMEOが出版した杉村陽太郎著「日本の進化」から推測できる。両方ともISMEOの創始者で会長のイタリア人哲学者ジョヴァンニ・ジェンティーレの影響を受けたものであった。ここで疑問なのは、イタリア人は日本人の人生哲学や、それのスポーツ練習への影響について何を本当に知っていたのか、ということである。また彼らがスポーツ活動に関して、メンタル･コントロールに特別重きを置いていることを知っ

ていたのだろうか。当時の新聞記事を注意深く読むと、文化的な欲求をほとんど持つことなく、我々が余暇志向の社会の中で考えていたスポーツとは全く異なる現実があるということを、想像さえしなかったと明確に記されている。

我々の相手は、フランス・アメリカとの対抗陸上競技大会（コロンブ五輪競技場）に参加したパリから、8 月 27 日 20 時 10 分の列車でトリノのポルタ・ノーヴァ駅に到着した。その夜、駅には 36 人の選手と 2 人の役員、そして翌朝に数名が加わったが、彼らにはイタリア陸連の役員でエンジニアのトッリンがフランスの首都から同行していた。日本の陸上チームの広報は渋谷寿光で、手厚い歓迎をしてくれた全てのイタリア人に感謝した。《駅の混雑はなかったものの、多くのファンが詰めかけた。みんな紙とペンを持って、有名な外人選手達のサインとお辞儀を待ち構えていたが、うまくはいかなかった。日本人は礼儀正しく笑顔だったが、クールで静かで無言だったのだ。人々が唯一接触できたのは田島直人だったが、数人に応えた後その場から立ち去ってしまった。そして広報は次のような公式声明を出した。イタリアへの旅は我が国の全国民の夢であり、それゆえに私たちは喜んであなたたちの招待を受け入れました。しかし残念ながら、私たちが最高の状態ではないことを認めなければなりません。私たちの選手のほとんどは疲れ果てていますが、それはオリンピック大会の競技のせいではなく、ヨーロッパ滞在中に耐え抜いてきた非常に長い移動のせいであります。私たちはベルン、ブダペスト、ストックホルム、パリに行きましたが、列車時刻のせいでいつもせかされていました（8 月 28 日付ガッツェッタ・デル･ポポロ紙)》。それから日本選手団は、我々が用意した市中心部のシテア・ホテルの部屋にたどりついた。翌日の 10 時 30 分、彼らはホテルを出発して観光に向かった《すぐに街の住人達に見つかった（8 月 29 日付ガッツェッタ・デッロ・スポルト紙)》。それからイタリア陸連の会長であるルイージ・リドールフィの案内で、スポーツ施設を見学した。一旦ホテルに戻ってから 16 時にメイン･スタジアムに隣接するトラックへトレーニングに出かけ、そこで彼らはイタリア･チームの選手数人と出会って、すぐに親しくなった。トレーニングはそれほどハードではなかったが、その最後の部分は《体育の興味深い体操に基づくものだった（8 月 29 日付ガッツェッタ・デッロ・スポルト紙)》。我々の客人達は 8 月 29 日の朝に市庁舎で歓迎を受けてから、この特別な機会のために作られた新競技場に集まったわずか 5000 人の観客が見つめる中、イタリア・日本対抗陸上競技大会が 16 時に始まった。旗手はイタリアが若き 400m走者スパンパーニで、日本は競歩の奈良岡良二が務めた。開始前、我々の選手達はメインスタンドの前に集まって儀式のお辞儀をし、観客は日本選手団にも同じことをするように求めた。そして国歌の演奏が始まった《天皇陛下万歳の厳粛で刺激的なリズムに対して、我々の君主陛下行進曲とファシスト党歌ジョヴィネッツァはどちらも軽快で軍人的な音だった（8 月 31 付リットリアーレ紙)》。両チームのキャプテン、ルイージ・ベッカーリ（競技には出なかった）と棒高跳の西田修平がペナントを交換し、競技会の幕が切って落とされた。翌 8 月 30 日の日曜日は日本大使館の人々などが加わった観客が 20000 人となり、15 時 40 分に競技は始まった。イタリアが 92 点対 81 点で勝った試合

の最後に、日本選手団は拍手を送る人々の前を行進し、大会の記念品として組織委員会が事前に用意していたメダルが、市長の手から一人一人に直接授けられた。

ここまで書いてきたことは全て、この話題についての当時の新聞や、競技の報告書、技術的考察から知ることの出来たものの要約である。国歌に関して、君が代ではなく天皇の長寿を願ってうれしそうに天皇陛下万歳と大声で叫んでいるという間違いはさておき、結果としてトレーニングの最後で見られた当時のストレッチで読者が感じたかも知れない、スポーツへの東洋的なアプローチの本質を突こうという指摘はなかった。ブルーノ・ザウーリが数か月後（1937 年 3 月 11 日号）に雑誌アトレティカに掲載した記事の中で、日本人は武士であり、それゆえにこの極東の選手達は偉大な闘士だったと述べている。さらに彼は、日本人は《トレーニングの丁寧さと規律に関しては世界一》で、小柄な彼らが試合でイタリアに敗れたのは、背の高さや大きなストライドが求められる種目でのハンディが大きすぎたのが主な理由だとしている。鉄の意志は日本の人々のよく知られた特性であり、3 年後の 1940 年に東京で開催される予定のオリンピックでは《この鉄の意志が、すばらしいパフォーマンスで勝利する鍵となる》と彼は強調している。ザウーリは先の疑問を深く掘り下げた唯一の人物である。たとえ彼が十分な解釈の手段を持ち合わせていなかったとしても、我々は彼の試みを評価しなければならない。

新渡戸稲造によって書かれた「武士道：日本の魂」という本が 20 世紀初頭に英語で出版されたことにより、ヨーロッパでは武士道が広く市民権を得ている。1910 年のロンドンに、ヨーロッパで初めて相撲の横綱が招かれ、この未知なるスポーツがどのようなものかということを西洋の人々に披露した。相撲はその一年後にイタリアに伝わったが、柔術はすでに 1908 年に二人の水兵によって伝えられており、この種の格闘技への興味は第一次世界大戦で遅れをとったものの、1921 年以降我々の国にも広がっていった。この年に我々の最高の指導者であるカルロ・オレッティが、ローマでたくさんの柔術の講座を始めて開いたのであるが、彼は 1924 年にイタリア柔術連盟（FIJJ）を設立することになる。同じ年、国内で柔道選手権が初めて行われた。我々は柔道をイタリア語で「日本レスリング」と名付け、1927 年には FIJJ は FILG（イタリア・日本レスリング連盟）へと名前を変えた。1928 年の夏、柔術のような軍事的な技をその教えによって柔道へと発展させた、かの有名な嘉納治五郎を我々のゲストに招くという喜びがあった。チャンピオンの森も手伝って、嘉納は柔道の秘技を我々に明かしてくれた。彼らがもたらした熱意により、イタリア連盟（FILG）は1928年にローマの軍事体育センターで柔道の審判とコーチのための最初の講座を設立した。しかしこのスポーツへの心酔はすぐに下向きとなり、1929 年が柔道の国内選手権が開催された最後の年となり（これは第二次世界大戦後すぐの 1948 年に復活した）、1931 年にイタリア連盟（FILG）は消滅した。このことから、ファンの数が少なかったのは別としても、1936 年のイタリアでは日本のスポーツの基盤となる道徳的信条の基準や理想、美徳についてはほとんど何も知られていなかったと推察できる。1936 年の陸上競技の試合は、イタリアが見失っていたそれらのものを知る機会となったのは疑う余地のないことである。